高卒5年 どう生き、これからどう生きるのか

――若者たちが今<大人になる>とは――

■ 乾 彰夫 編
■ 大月書店
■ 2013年初版
■ 3,000円（税別）

本書は、タイトルが示す通り、現代日本の高校を卒業した若者たちが、進学・就職などそれぞれの途を歩みながら、どのように<大人になって>いくのかを、主題としている。もとになったデータは、東京の2つの公立高校（難易度中・低）の2003年3月卒業生89人（最終回では31人）に対する、計5回足かけ7年間にわたる、首都大学東京の研究グループによるインタビュー調査である。

2002年秋、最初のインタビュー調査で、高校卒業を来春に控えた高校3年生の若者たちは、大学や専門学校への進学、就職など、多様な進路を語っていたが、高卒者の就職状況が厳しい当時、すでにその中にかなり多くの「進路未定者」がいたことが示されている。1年後のインタビューでの、高卒後、働き始めた若者たちの語りには、いじめや過労、セクハラなど、さまざまな問題に直面した経験も含まれていた。

3回目のインタビューで、分岐はさらに大きくなり、5回目2007年から8年にかけて行われた調査では、大学進学組の就業者も加わって、経験の違いはさらに拡大した。中でも難易度低の高校を卒業した女性たちは、多くが不安定低賃金のフリーター生活から抜け出せない状況に陥っていた。彼女たちのなかには、性的サービス労働に従事する経験を持つものもいた。

今、若者が<大人になる>とは、経済的自立の意味に限ってみても、少なくとも一部の者にとっては、年齢が来れば階段を上るように簡単に実現できることなのではなく、いつも同じ場所に戻ってしまう押し車を落ちないよう必死に押す努力をすることなのであり、いつそれが終わるのか見えないまま今後も生きていかなければならないことなのである。本書は、現代日本の若い女性たちの就業業況を考察する上でも、重要なデータを提供していると言えるだろう。

江原（えはら） 由美子（ゆみこ）（首都大学東京大学院人文科学研究科教授）

性的サービス労働

本書では、性的サービス労働を、「性的なサービスによって対価を得るすべての仕事」として大きく把握する。その上で、従事する女性たち自身が線引きする労働の辛さの違いをもとに、「性的サービス労働」の中の内容的な違いを明らかにしている。

また本書では、これまでの「若者研究」や「セックスワーク」に関連する先行研究があまり試みてこなかった「若年女性の就業行動全体の中に性的サービス労働への従事を位置づける」という研究視点を立て、「性的サービス労働」と「他の仕事」との出入り状況や掛け持ち状況、「性的サービス労働」の中での移動などを論じ、若年女性の労働の実態に即した把握を試みている。

――子どもと話す――

マッチョってなに？

■ クレマンティーヌ・オータン 著
■ 山本 規雄 訳
■ 現代企画室
■ 2014年初版
■ 1,200円（税別）

本書は、フランス人女性の著者が、年の離れた弟（10代後半）からの問いかけに答えるという、個人的な対話形式で書かれたフェミニズムの入門書である。レイプの被害にあった体験からフェミニストになったという著者は、社会の中に巣くう「マッチョ」な価値観、すなわち男性優位主義の病理を鋭くあぶり出してみせる。

しかし、男でもフェミニストになれるのか、という弟の問いに「もちろん！」と即答する著者は、男性嫌悪を表明するために本書を書いたのではない。彼女は、フランスにおける法制度の歴史をふまえつつ、選挙権、教育、宗教、労働、同性愛、売春など、男女間の不平等に連動する社会の諸問題を次々俎上（そじょう）に載せていく。また、著者の目線は、自国やヨーロッパの外側にも向かう。とりわけ、「アラブ世界やアフリカ大陸以上に、アジアは女性にとっては未だに暗黒大陸」であり、「フェミニストの闘いは国際連帯主義でなければならない」と説く言葉は傾聴に値するだろう。

「子どもと話す」ことを謳（うた）う本書は、実のところ「子ども」が読むにはいささか高度な内容だが（本書の邦題は原題を柔らかく意訳したもの）、国際的な視点からジェンダー／セクシュアリティの問題系を広く見渡す解説書として、多くを教えられる一冊である。

舌津（ぜつつ） 智之（ともゆき）（立教大学文学部教授）

マッチョ

もともとは中立的に「男性」や「雄」を意味するスペイン語が、20世紀前半に英語化される過程で、「顕著に、これ見よがしに男性的」な資質を強調して指す言葉として使用されるようになった。とりわけ、ラテンアメリカ系の男性を念頭に、米国で広まった概念である。日本語としての「マッチョ」は、広辞苑によると、「男っぽいさま。特に、外面的な体形・筋肉などについていう」と定義されている。しかし、ジェンダー論の文脈で考慮されるべきは、外見より、内面的な男性性の構築プロセスであり、ひいては、文化的・社会的意識の問題である。

「女子」の誕生

■ 米澤 泉 著
■ 勁草書房
■ 2014年初版
■ 2,600円（税別）

「女子」や「ガール」が氾濫している。本書はこの現象の発生と展開について、実用ファッション誌を分析対象に、2000年代以降に変化した女性の生き方を、社会意識との関連で論じたものである。

従来の雑誌分析は、見出しや記事本文の言説研究にとどまることが多かったが、登場モデルや、扱われるアイテム、それらが意味するものに視点が行き届く本書は、ファッション誌とともに生きてきた1970年生まれの著者ならではの息づかいまで感じさせ、飽きさせない。

女性学の雑誌研究では、1990年代までの、年齢や社会的役割にふさわしい装いや「男性の目」を重視した「モテ」メイクやファッションを提案するファッション誌は、批判の対象になることが多かった。しかし、筆者は、女性の役割規範に忠実な『JJ』など（タイトルの色から赤文字雑誌といい、本書はこれを「制服提案型雑誌」とよぶ）から、自分のために装うことを重視した『Sweet』など（青文字雑誌）、「女子」の時代のファッション誌への「政権交代」を重視する。政権交代はファッションによって良妻賢母規範をすり抜ける「女子」の登場を意味するというわけだ。ただし、そこに希望を見るか、限界を見るかは、読者にゆだねられるのであるが。

国広（くにひろ） 陽子（ようこ）（東京女子大学現代教養学部教授）

婦人・女性・女子

言葉は歴史的・社会的な諸条件のもとで使用され、意味を変容させる。明治期以降、公的には「女子」ないし「婦人」と呼ばれた「女」は、戦後の民主化の過程で「女性」になった。「女性」のほうが「女子」より新しい言葉だ。1970年代ウーマンリブは婦人運動ではなく、女性運動と呼ばれ、「労働省婦人少年局」、「国立婦人教育会館」も90年代にはそれぞれ「女性」へと変更された。

一方、明治以来の国家・社会制度に組み込まれた公的言葉だった「女子」を、今日の「女」たちは年齢規範を超えて、性的含意を持たない集団的アイデンティティを示す自称として用いるようになっている。「飲み会」で出発した「女子会」を「怒れる女子会」など政治運動へと転用して盛り上げる動きに注目したい。

婦人保護施設と売春・貧困・DV問題

――女性支援の変遷と新たな展開――

■ 須藤 八千代、宮本 節子 編著
■ 明石書店
■ 2013年初版
■ 2,600円（税別）

婦人保護施設を知っているだろうか。婦人保護施設は、制度化されてすでに50年以上を経ているにもかかわらず、根拠法が売春防止法であることや施設数の少なさなどから、社会福祉、女性政策の分野においても、ほとんど注目されてこなかった。そのことは、タイトルに「婦人保護施設」を冠した初の書物であることからもうかがえる。本書は婦人保護施設に真正面から向き合い、その現実や矛盾、支援の諸相を、7人の論者が多様な視点から浮き彫りにし、展望を拓こうとした。

本書では、ジェンダー不平等な社会における婦人保護施設利用女性の生活困難の一端を明らかにするが、それらは決して特別な女性の特殊な問題ではなく、広く女性に共通する「私たち」の問題である。一方で、婦人保護施設は、「要保護女子」の「保護更生」の一貫として位置づけられてきたため、「管理と監視」の場となる危うさを常にはらんできた。そうした婦人保護施設における支援を丁寧に紐解きながら、支援対象とは誰か、その専門性とは何か、女性を支援する場としての存在意義はどこにあるのかを問い、これからを構想する貴重な著作である。社会福祉関係者にはもとより、ジェンダー問題に関心のある人々にぜひ薦めたい。

堀（ほり） 千鶴子（ちづこ）（城西国際大学福祉総合学部教授）

婦人保護施設

売春防止法に基づく、女性のみを対象とした社会福祉施設である。そもそもは「要保護女子」（＝性行または環境に照らして売春を行うおそれのある女性）を「収容保護」し、自立更生を図ることを目的としていたが、2001年の「配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護に関する法律」において、DV被害女性も支援の対象とされた。現在では、シェルター機能をもつ施設も多い。婦人保護施設利用者には疾病や障がい、暴力被害が目立ち、施設には多様な支援が求められている。